

スポーツ・コミットメントの形成とスポーツ参与に関する研究（1）：スポーツにおける友人関係によるコミットメント尺度作成の試み

金崎, 良三
Institute of Health and Science Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/572>

出版情報：健康科学. 14, pp.35-42, 1992-02-08. 九州大学健康科学センター
バージョン：
権利関係：

スポーツ・コミットメントの形成とスポーツ参与に関する研究 (1)

—スポーツにおける友人関係によるコミットメント尺度作成の試み—

金 崎 良 三

A Study on the Formation of Sport Commitment and Sport Involvement(1): Commitment Scale composed of Human Relation through Sport Involvement

Ryozo KANEZAKI

Abstract

As people's interests in lifelong sport are increasing, a study on the continuation of sport involvement is becoming more important. It would be said that the concept of commitment is useful for this kind of study. Sport commitment means attachment or adherence to sport. A person who commits to sport firmly will be involved in sport activity naturally. Concerning sport commitment, some noticeable researches have been conducted by Snyder & Spreitzer(1983), Leonard & Schmitt (1987), Curry & Parr(1988) and Stevenson(1990) in America recently, whereas very few researches are found in Japan. The purpose of this paper is to make a sport commitment scale by grasping human relation quantitatively and qualitatively through sport involvement and to verify its validity.

The investigation was conducted to 620 male and 427 female college students by questionnaire method at Fukuoka City in June, 1989. The results are summarized as follows:

The students, both male and female, who belong to high level group of sport commitment regard sport as more important and engage in sport activities more frequently($p < .001$). They also invest more time and money in sport activities compared with the students who belong to low level group of sport commitment($p < .001$). That is to say, the students who have formed sport commitment firmly tend to adhere to sport obviously. In consequence, sport commitment scale made in this study reflects sport involvement of the subjects precisely and its validity have been verified.

Key Words : Sport commitment, Human relation, Sport involvement, Student

(Journal of Health Science, 14 : 35—42, 1992.)

緒 言

従来、スポーツ参加に関する研究は多く行われてきたが、生涯スポーツが社会的に注目されるようになった今日においては、いかにスポーツ行動を継続していくかについての研究も重要になってこよう。人はなぜスポーツをするのかということ、あるいは人がスポーツを実施することについて、スポーツ目的論やスポーツ手段論の立場からの説明がこれまでなされてきた。スポーツ目的論では、スポーツを自己目的的活動と捉え、その活動すること自体が楽しいから、あるいは意義があるので人びとはこれを行うとするものであり、スポーツ手段論ではスポーツをある何かの目的を達成するための手段的活動と捉え、例えば健康・体力づくりとか人間形成、ストレス解消、仲間づくり、生活の充実などのために行うとするものである。

一方、主としてスポーツ社会学の分野でこれまで行われてきたスポーツへの社会化研究においては、スポ

ーツ行動を規定する諸要因を明らかにし、これらの要因でもって人びとのスポーツ行動を説明する試みがなされてきた。このような試みは、人びとのある時期におけるスポーツの実施・非実施を説明したり予測したりすることについては可能でありそれなりの意味をもつが、比較的長期にわたるスポーツの継続的実施の説明となると、スポーツの目的論や手段論を超えたもつと別の視点からのアプローチが必要ではないかと考え、そこで注目したのがコミットメント(Commitment)の概念である。

コミットメントに関する研究は、アメリカにおいては1960年代に始められているが、Becker¹⁾はコミットメントについて、「人間行動の一貫した方向を生みだし、またそれ以外の経路をますます犠牲にするところのエネルギーの投入である。コミットメントは、このように賭けをすることによって達成される。すなわち、人間はもともと外部に存在した他の関心にかかわるような方法によってある役割にコミットされる。」と述べて

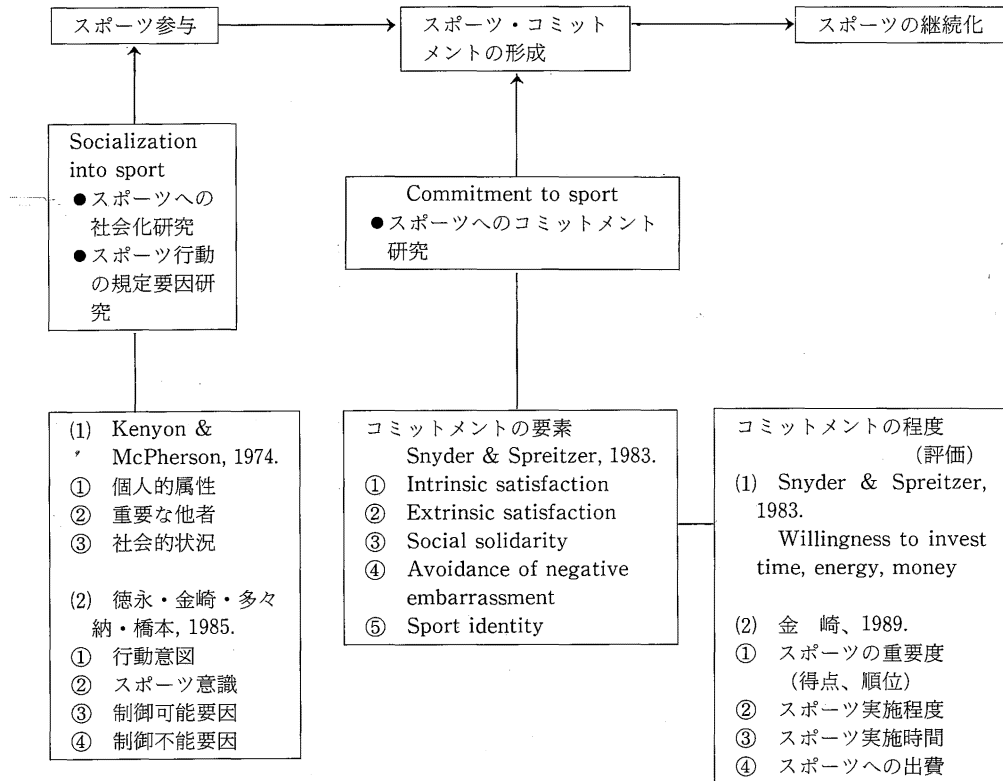


Figure 1. Paradigm of study on sport commitment

いる。ここでいう賭けの意味は、他の行動を犠牲にしてある行動にエネルギーを投入するのであるから、人間の主体的決定が一時的な損失を超えてより大きな帰結をもたらすということである。このように、Beckerはコミットメントの概念でもって人間の行動の一貫性または安定した方向性を説明しようとした。

一方、Mol¹¹⁾は、宗教の社会科学的研究を進めるなかで、「コミットメントは、持続するものである。コミットメントは集団や思想への情緒的執着や忠誠を意味する。それゆえ、それは簡単には取り除けるようなものではない。」と述べている。宗教の分野では、コミットメントを宗教的信服という意味に使うこともある¹⁰⁾。また、社会学小辞典⁹⁾によれば、特定の社会規範や目標または集団などへの内的な献身を意味し、その欠如をノン・コミットメントとしている。このように、コミットメントの概念はさまざまに解釈されているが、要するにそれはある行動や集団、思想、価値などへの傾倒、執着、結びつき、忠誠などを意味する用語であり、いわば疎外とは反対に位置する概念といってよい。

そこでまず、スポーツ・コミットメントの研究を開始するにあたり、その意味と研究の位置づけを明らかにしておこう。スポーツ・コミットメントは、スポーツへの傾倒、執着、結びつき、あるいはスポーツ行動やスポーツ集団に身を投入することを意味する。すなわち、スポーツへのコミットメントが形成されていれば、その個人は、スポーツとのかかわりが深いということになる。図1は、スポーツ・コミットメント研究の位置づけを明らかにするために作成したパラダイムである。金崎ら^{9),18)}は、これまでスポーツへの社会化研究の一環としてスポーツ行動の規定要因に関する研究を進めてきた。スポーツへの社会化とは、スポーツの技術や知識、スポーツ行動様式、スポーツに対する態度、価値などを個人が内面化していく過程をいう。つまり、人はどのようにしてスポーツとのかかわりをもつようになるのか、そこにいかなる要因が関与するかといったことが問題となる。例えば、Kenyon & McPherson⁸⁾は、スポーツへの社会化要因として①個人的属性、②重要な他者、③社会的状況の3つを指摘した。また徳永ら¹⁹⁾は、Fishbeinの行動予測モデルに依拠しながら、スポーツ行動を説明したり予測したりする要因として、①行動意図、②スポーツに対する態度やスポーツの効果に対する信念、スポーツについての他者の期待に対する信念（規範信念）などのスポーツ意識、③スポーツ条件や性格、身体的要因、生活意識などの主体的制御可能要因、および④性、年齢、学歴、

職業、家庭環境、生活条件、経済条件、生活時間などの客体的制御不能要因を指摘した。これらはいずれも、スポーツ行動の実施・非実施の説明には有効であることが実証されている。そこで、ここではスポーツに参加することによってスポーツへのコミットメントが形成され、そのことがスポーツの継続化につながるという図式を設定した。

コミットメント研究において多大な貢献をしたBeckerの考え方は、Snyder¹²⁾やLeonard & Schmitt⁹⁾、Curry & Weaner³⁾などによってスポーツ社会学の分野に取り入れられた。そして、スポーツ・コミットメントが、スポーツ行動の実施やその継続化を説明するのに有効な概念であることは、Snyder & Spreitzer¹³⁾やStevenson¹⁵⁾などによって明らかにされている。例えば、Snyderら¹⁴⁾はコミットメントの要素として、①スポーツをすることの楽しさ、喜び、面白さといった内的満足、②スポーツをすることによってもたらされる勝利、威厳、承認、健康、金銭、トロフィーといった外的満足、③人びととの社会的連帯、④失敗や地位の喪失、汚名など否定的困惑の回避、⑤スポーツの世界にとどまろうとするアイデンティティ、の5つをあげている。そして、スポーツへの時間とお金とエネルギーの投入意志によってコミットメントの程度が決り、これがスポーツ参加の程度を規定するというモデルを提示した。

またCurry & Parr⁴⁾は、ある役割アイデンティティを維持していくのに最も重要な変数はそのアイデンティティに関連するところの人間関係であるというStryker & Serpeの理論に依拠して、スポーツにおける人間関係を把握することによって、コミットメントの程度を得点化してその有効性を実証した。このように、スポーツ・コミットメントの研究はアメリカにおいていくつか着手されている。

さて、スポーツ・コミットメントについての研究は、わが国においてはいかなる状況にあるのであろうか。コミットメントという言葉自体はいろいろなところで使用されているが、体育・スポーツの研究分野においては、僅かに高橋¹⁷⁾や菅井ら¹⁶⁾の報告があるのみであり、本格的な研究はみられない。そこで本研究は、大学生を対象に、個人のある行動へのコミットメントの形成がその行動を規定するという前提に立って、スポーツを通じての友人関係を質的量的に把握することによって、スポーツ・コミットメントの尺度を作成しその有効性を検証しようとするものである。

研究方法

1. 調査の概要

(1) 調査対象

福岡市内の国立K大学, 私立F大学, S大学およびF短期大学において, 1年次と2年次の学生計1,117名を対象に調査を実施した。

(2) 調査方法

質問紙「スポーツ活動についての調査」を作成し, 体育の実技および講義の時間を利用して, 集合調査法で行った。

(3) 有効回収数

有効回収数は, 男子620名, 女子427名, 計1,047名であり, 集計率は93.7%であった。

(4) 調査時期

調査時期は, 平成元年6月である。

2. スポーツ・コミットメントの測定

スポーツ・コミットメントをどのような内容と方法でもって測定するかということは, まさに本研究の中心課題である。既に述べたように, Snyderらは時間とお金とエネルギーのスポーツへの投入意志でもってコミットメントの程度が決定するとしており, Curryらはスポーツにおける人間関係を把握しこれを得点化することによってコミットメントの測定を行った。また, スポーツ心理学の分野においても, 近年スポーツ・コミットメントの研究に関心がもたれつつあり, Carmack & Martens⁹⁾はランニングに対する態度を測定することによって, コミットメント尺度を作成している。このように, コミットメントの測定方法はいくつか考えられるが, 本研究ではCurryらの方法に依拠することにした。その理由は, 彼らの研究が筆者と同じスポーツ社会学の視点から行われており, コミットメントの得点化が比較的容易であることによる。

3. 分析方法

スポーツを通じての知人・友人について, その親密度を①単に知っている, ②名前をきちんと知っている, ③大切な仲間, ④親友の4段階に分け, さらに各々の段階での知人・友人の数を5つのカテゴリーに区分して得点化した。すなわち, ①~③については0人=1点, 1~5人=2点, 6~10人=3点, 11~20人=4点, 21人以上=5点, ④については, 0人=1点, 1~2人=2点, 3~4人=3点, 5~6人=4点, 7人以上=5点とし, これらの得点を合計してコミットメント・スコアとし

た。このコミットメント・スコアにより, スポーツ・コミットメントの程度を高い順からレベル1=17~20点, レベル2=14~16点, レベル3=11~13点, レベル4=8~10点, レベル5=4~7点とした。今回の対象者の場合, 各々のコミットメントのレベルに該当するサンプル数とコミットメント・スコアの平均値は, 表1に示

Table 1. Level of sport commitment, number of subjects and commitment score

コミットメント	男子		女子	
	N	M	N	M
レベル1	272	18.6	111	18.5
レベル2	159	15.1	128	15.0
レベル3	78	12.1	49	12.0
レベル4	55	9.0	53	8.8
レベル5	56	4.6	86	4.7

すとおりである。コミットメント尺度の有効性を検証するため, コミットメントのレベルと図1の研究パラダイムに示すように対象者のスポーツの重要度, スポーツの実施程度, 実施時間, スポーツへの出費などとの関係を分析した。なお, 各レベル間の有意差の検定は, F検定およびカイ自乗検定を行った。

結果と考察

1. スポーツ・コミットメントのレベルとスポーツ参与

表2は, スポーツ・コミットメントのレベルとスポーツ参与関連項目との関係を男女別にみたものである。表中のスポーツの重要度得点は, 本人にとってスポーツがどの程度重要であるのかを10点満点で質問したものである。尺度は, 「重要でない」が0点, 「まあまあ重要」が5点, 「非常に重要」が10点となっており, 得点が高いほどスポーツを重要視していることになる。スポーツの重要度順位というのは, 「勉強(成績)」, 「友人(同性)」, 「スポーツ」, 「音楽」, 「恋愛(異性)」および「読書(勉強以外)」の6つのことがらを並記して, 重要と思われる順に番号をつけてもらい, スポーツが相対的にどのあたりに位置するかをみたものである。したがって, 得点が低いほどスポーツの重要度順位が高いことを示す。スポーツの実施程度は, 「ほとんど毎日実施」から「ほとんど非実施」までの5つのカテゴリーに対して1~5点の得点を与えたものであり, 得点が低いほどスポーツの実施程度が高いことを示す。またスポーツの実施時間については, 週単位の時間数

を「スポーツはほとんど非実施」から「週31時間以上」までの8つのカテゴリーを設定し、それぞれ1～8点を与えたものである。したがって、高得点であるほどスポーツの実施時間は長いことになる。スポーツのための出費は、スポーツウェアや用具費、試合参加費、遠征費、施設使用料などスポーツを実施するために必要な年間の費用を計算し、それを1か月平均に換算してその金額に応じて得点化したものである。すなわち、「月額1,000円未満」から「月額9,000円以上」までを6区分し、それぞれ1～6点を与えた。得点が高いほど、スポーツへの出費が多いことを示す。

分析の結果を、まず男子からみていくと、すべての項目についてスポーツ・コミットメントのレベル5からレベル1へ、つまりレベルの低い群から高い群へといくに従って得点の変化がみられる。すなわち、コミットメントのレベルが高い群ほどスポーツの重要度得

点と重要度順位が高く、スポーツの実施程度も高い。そして、週平均のスポーツ実施時間も長く、スポーツに費やす金額も多い傾向が明確にみられる。女子の場合は、スポーツの実施程度に関して、レベル3の群とレベル4の群の間で僅かな得点の逆転現象がみられる以外は、男子とほぼ同様の傾向を示している。ここでは、コミットメントのレベル1と3と5の群の間で、平均得点のF検定を行ったが、すべての項目について男女とも0.1%水準で有意差が認められた。以上のことから、男女ともコミットメントのレベルが高い群ほどスポーツとの結びつきが深いといえる。

2. スポーツの実施程度

次に、コミットメント・スコアによるレベル1をコミットメントの高位群、レベル3を中位群、レベル5を低位群として、日頃スポーツを実施している者につ

Table 2. Relation between level of sport commitment and sport involvement

スポーツ・コミットメント		項目 N	(平均得点)					
			(1) 重要度得点	(2) 重要度順位	(3) 実施程度	(4) 実施時間	(5) 出費	
男子	高	レベル1	272	7.94	2.84	1.60	4.76	4.31
	↑	レベル2	159	7.31	3.03	1.92	4.14	3.76
		レベル3	78	6.22	3.47	2.85	3.15	2.76
		レベル4	55	5.56	3.95	3.60	2.33	2.07
	低	レベル5	56	4.73	4.47	4.50	1.32	1.29
F検定 1-3-5			P<.001	P<.001	P<.001	P<.001	P<.001	
女子	高	レベル1	111	7.50	3.24	2.05	4.04	3.89
	↑	レベル2	128	7.02	3.37	2.43	3.57	3.59
		レベル3	49	5.80	4.20	3.92	2.08	1.94
		レベル4	53	5.60	4.71	3.89	1.79	1.41
	低	レベル5	86	3.84	5.16	4.78	1.22	1.07
F検定 1-3-5			P<.001	P<.001	P<.001	P<.001	P<.001	

Table 3. Rate of sport involvement

スポーツ・コミットメント		項目 N	(%)			
			殆ど毎日	週5日以上	週3-4日	週1-2日
男子	高位群	258	74.0	14.0	8.5	3.5
	中位群	63	30.2	22.2	31.7	15.9
	低位群	20	5.0	0.0	25.0	70.0
女子	高位群	103	58.3	11.7	20.4	9.7
	中位群	29	6.9	10.3	41.4	41.4
	低位群	15	0.0	6.7	13.3	80.0

(N=実施者のみ) 男子P<.001, 女子P<.001

いて、その程度をみてみよう。表3は、3か月間のスポーツの平均実施程度を示したものである。男子は、コミットメントの高位群はスポーツをほとんど毎日するという者が74.0%を占めており、中位群、低位群を大きく引き離している。逆に、低位群は月に1～2回程度実施する者が7割を占めるに至っている。一方、女子の場合はほとんど毎日実施する者は高位群が約6割と断然多く、低位群にいたっては皆無であった。また、月に1～2回程度実施するという者は高位群が1割に満たないのに対し、低位群は8割と大部分を占めている。コミットメントの中位群はだいたい中間的な

位置にあるとみてよい。男女とも、3群間には顕著な差がみられ、スポーツ・コミットメントの程度の差がスポーツの実施程度を規定することが明らかとなった。

3. スポーツの実施時間

次に、コミットメントの程度と週あたりのスポーツ実施時間との関係を見てみよう(表4)。男子の場合、コミットメントの高位群は「11~15時間」という者が最も多く23.2%を占め、以下「16~20時間」(20.6%)、「6~10時間」(14.7%)の順となっている。中位群は、スポーツ非実施者が20.5%いるが、実施している者では、「1~2時間」や「3~5時間」、「6~10時間」という者が全体の6割近くを占め、週に11時間以上スポーツを実施している者は少ない。低位群では、スポーツ非実施者が71.4%と圧倒的に多く、実施している者では「1~2時間」という者が25.0%、「3~5時間」という者が僅かに3.6%みられるだけである。

女子の場合は、男子よりスポーツの実施時間は少なく、全体的に多様な傾向にある。すなわち、コミットメントの高位群は「1~2時間」(18.9%)、「11~15時間」

間」(18.0%)、「3~5時間」(17.1%)、「21~30時間」(12.6%)といったところが比較的多い。中位群は、スポーツ非実施者が半数以上と第1位を占めており、実施者間では「1~2時間」(18.4%)を筆頭にあとは時間数が増えるにつれその割合は少なくなっている。低位群は、スポーツ非実施者が84.9%と大部分を占めており、「1~2時間」が11.6%、「3~5時間」が2.3%、「16~20時間」が1.2%みられる程度である。

以上のことから、男女ともスポーツ・コミットメントが強く形成されている者ほど、週あたりのスポーツの実施時間は長いと見てよい。

4. スポーツのための出費

スポーツのためにどの程度の出費があるかは、種目によって異なるとはいえ、その個人がスポーツとどの程度かかわりをもっているかを知る手掛りの1つになる。表5によると、男子はコミットメントの高位群には月額の出費が最も多い「9,000円以上」という者が第1位に多く、「5,000円~7,000円」という者がこれに続いている。中位群には「1,000円未満」と「1,000円

Table 4. Time invested in sport activity in a week

		項目	ス ポ ー ツ 非 実 施 者	1 2 時 間	3 5 時 間	6 10 時 間	11 15 時 間	16 20 時 間	21 30 時 間	31 時 間 以 上	無 記 不 明
		N									
男 子	高 位 群	272	5.9	9.2	9.2	14.7	23.2	20.6	12.5	4.8	0.0
	中 位 群	78	20.5	24.4	17.9	16.7	7.7	3.8	7.7	1.3	0.0
	低 位 群	56	71.4	25.0	3.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
女 子	高 位 群	111	9.9	18.9	17.1	9.0	18.0	9.0	12.6	3.6	1.8
	中 位 群	49	51.0	18.4	12.2	12.2	2.0	4.1	0.0	0.0	0.0
	低 位 群	86	84.9	11.6	2.3	0.0	0.0	1.2	0.0	0.0	0.0

男子P<.001, 女子P<.001

Table 5. Money invested in sport activity in a month

		項目	1 未 0 0 0 0 0 円 満	1 3 0 0 0 0 0 0 0 0 円	3 5 0 0 0 0 0 0 0 0 円	5 7 0 0 0 0 0 0 0 0 円	7 9 0 0 0 0 0 0 0 0 円	9 以 0 0 0 0 0 円 上	無 記 不 明
		N							
男 子	高 位 群	272	7.7	14.7	7.4	19.5	5.1	42.6	2.9
	中 位 群	78	34.6	26.9	5.1	9.0	1.3	20.5	2.6
	低 位 群	56	80.0	10.7	3.6	3.6	0.0	0.0	1.5
女 子	高 位 群	111	16.2	12.6	11.7	10.8	3.6	36.0	9.0
	中 位 群	49	59.2	16.3	6.1	4.1	2.0	8.2	4.1
	低 位 群	86	88.4	7.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.7

男子P<.001, 女子P<.001

～3,000円」の者が多く、低位群には「1,000円未満」の者が大部分を占めている。女子は、高位群にはやはり「9,000円以上」の者が最も多く、中位群と低位群には「1,000円未満」の者が他を引き離して第1位を占めている。このように、男女ともスポーツ・コミットメントの程度が高い者ほど、スポーツのための出費が多い傾向が伺える。

5. スポーツ実施のパターン

最後に、スポーツ・コミットメントとスポーツ実施のパターンとの関係をみてみよう。これは、コミットメント尺度の検証のための分析内容として考慮してはいないが、対象者のスポーツとの質的なかわり方を探るのに有効と思われる。スポーツ実施のパターンについては、①競技会出場型（競技会出場のため、定期的にスポーツの練習をよく行うタイプ）、②体力づくり型（競技会ではないが交流試合に出たり、体力づくりなどのため継続的にスポーツを行うタイプ）、③楽しみ型（暇なときに仲間と、ときどきスポーツを楽しむタイプ）、④行事参加型（年に数回、スポーツ行事に参加するタイプ）、⑤スポーツ非実施型（ほとんどスポーツを行わないタイプ）の5つを設定した。このうち①と②のパターンは定期的継続的にスポーツの練習をするものであり、量的にスポーツの実施程度は高く、以下③、④、⑤といくに従って実施程度は低くなるものと考えてよい。

表6は、その結果である。まず男子の場合をみると、コミットメントの高位群は競技会出場型が断然多く、あとは体力づくり型と楽しみ型が少しみられる程度である。中位群は、楽しみ型が4割強と第1位を占めており、競技会出場型と体力づくり型もかなりみられる。低位群は、楽しみ型とスポーツ非実施型がともに4割

以上に達しており、その他のパターンは僅かである。高位群と中位群に、行事参加型やスポーツ非実施型が僅かしかみられないのは、スポーツの実施程度との関係があるものと考えてよい。

女子の場合は、コミットメントの高位群は競技会出場型が6割以上を占めてやはり第1位に多く、以下楽しみ型、体力づくり型の順となっている。中位群は、楽しみ型が57.1%と最も多く、以下競技会出場型とスポーツ非実施型が少しみられる。低位群は、スポーツ非実施型が半数以上と最も多く、次いで楽しみ型が4割とかなりの割合を占めている。このようにみえると、男女ともスポーツ・コミットメントの程度の高い者は、競技会に出場するためにスポーツを定期的、継続的に行うパターンの者が多いといえる。当然のことながら、コミットメントの程度が低い者は、スポーツとの深いかかわりはなく、ときどきスポーツを楽しむかまたは実施しないというパターンの者が多い。また、楽しみ型がコミットメントの低位群にもかなり多くみられたということは、ときどきスポーツを楽しむという場合の実施程度の解釈がさまざまであることを示唆していると考えられる。

結 論

大学生を対象にして、スポーツを通じての知人・友人関係を把握することによって、スポーツ・コミットメントの尺度を作成し、その有効性を検証すべく分析を進めてきた。その結果、男女ともスポーツ・コミットメントの程度が高い者ほど、①スポーツをより重要視している、②スポーツの実施程度が高い、③スポーツの実施時間が長い、④スポーツへの出費が多い、という傾向が明らかにみられた。すなわち、スポーツへのコミットメントが強く形成されている者ほど、スポ

Table 6. Pattern of sport involvement

スポーツ・コミットメント		項目	競出	体く	楽	行	ス非	無
		N	技場	力り	し	事	ポ実	記
			会型	つ型	み	参加	1施	不
					型	型	ツ型	明
男	高 位 群	272	72.4	15.8	9.6	0.4	1.5	0.4
	中 位 群	78	24.4	21.8	42.3	3.8	7.7	0.0
	低 位 群	56	0.0	1.8	42.9	10.7	44.6	0.0
女	高 位 群	111	62.2	12.6	24.3	0.0	0.9	0.0
	中 位 群	49	18.4	8.2	57.1	4.1	12.2	0.0
	低 位 群	86	0.0	0.0	40.7	4.7	54.7	0.0

男子 P<.001, 女子 P<.001

ーツとの結びつき、あるいはかかわりが深い。反面、スポーツへのコミットメントが形成されていない者ほど、これらとは逆の傾向にあった。したがって、ここで作成したスポーツ・コミットメント尺度は、対象者のスポーツとの結びつきを的確に表わしており、その有効性は証明された。さらに、スポーツ・コミットメントが形成されている者は、スポーツ参加のパターンが、スポーツを定期的、継続的に実施するところの競技会出場型に属する者が多いことも明らかになった。本研究の結果は、スポーツへの時間とお金とエネルギーの投入意志がコミットメントの程度を規定するという Snyder らの考えをも支持するものといえる。

今後は、調査対象者を拡大して、コミットメント尺度の有効性をさらに検証するとともに、スポーツ・コミットメント形成の規定要因を明らかにしていくことやコミットメント概念を用いてのスポーツの継続化モデルを構築していくことなどの課題に取り組みたい。(本稿は、第41回日本体育学会での研究発表をまとめたものである。)

謝 辞

本研究のための調査の実施にあたって、西南学院大学の米谷光弘助教授と福岡女子短期大学の城石明子助教授には、多忙な折にも拘わらず多大なご協力を頂いた。ここに、厚くお礼を申し上げる次第である。

文 献

- 1) Becker, H. S. : Notes on Concept of Commitment, *American Journal of Sociology*, 66, P. 35, 1960.
- 2) Carmack, M. A. & Martens, R. : Measuring Commitment to Running : A Survey of Runners' Attitudes and Mental States, *Journal of Sport Psychology*, 1, 1, 25-42, 1979.
- 3) Curry, T. J. & Weaner, J. S. : Sport Identity Salience, Commitment, and the Involvement of Self in Role : Measurement Issues, *Sociology of Sport Journal*, 4, 280-377, 1987.
- 4) Curry, T. J. & Parr, R. : Comparing Commitment to Sport and Religion at a Christian College, *Sociology of Sport Journal*, 5, 369-377, 1988.
- 5) 濱島 朗, 竹内郁郎, 石井 弘編 : 社会学小辞典, 有斐閣双書, P.117, 1982.
- 6) 金崎良三, 多々納秀雄, 徳永幹雄, 橋本公雄 : スポーツ行動の予測因に関する研究(1)—社会学的要因について—, *健康科学*, 第3巻, 55-69, 1981.
- 7) 金崎良三, 多々納秀雄, 徳永幹雄, 橋本公雄 : 学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(3)—スポーツ関連要因について—, *健康科学*, 第4巻, 77-89, 1982.
- 8) Kenyon, G. S. & McPherson, B. D. : Approach to the Study of Sport Socialization, *International Review of Sport Sociology*, 9 (1), P. 128, 1974.
- 9) Leonald II, W. M. & Schumitt, R. L. : Sport Identity as Side Bet : Towards Explaining Commitment from an Interactionist Perspective, *International Review for the Sociology of Sport*, 22 (4), 249-262, 1987.
- 10) ミッチェル編(下田直春監訳) : 新社会学辞典, 新泉社, P. 263, 1987.
- 11) Mol, H. : Meaning and Place : An Introduction to the Social Scientific Study of Religion, The Pilgrim Press, New York, 1983, P. 43.
- 12) Snyder, E. E. : Identity, Commitment, and Type of Sport Roles, *Quest*, 35, 97-106, 1983.
- 13) Snyder, E. E. & Spreitzer, E. A. : Social Aspects of Sport, Second Edition, Prentice Hall, Inc. , 1983, 79-81.
- 14) Snyder, E. E. & Spreitzer, E. A. : 前掲13), 79-81.
- 15) Stevenson, C. L. : The Early Careers of International Athletes, *Sociology of Sport Journal*, 238-253, 1990.
- 16) 菅井祐子, 糸野 豊, 佐伯聡夫 : 運動部集団への所属と学校体系へのコミットメントに関する研究, 第33回日本体育学会大会号, P. 139, 1982.
- 17) 高橋豪仁 : 現代スポーツのもつ宗教的機能—プロ野球観戦者を事例として—, 昭和62年度体育社会学研究室学士・修士論文発表抄録, 筑波大学体育社会学研究室, 105-114, 1988.
- 18) 徳永幹雄, 橋本公雄, 金崎良三, 多々納秀雄 : 学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(1)—心理的・身体的要因について—, *健康科学*, 第4巻, 35-49, 1982.
- 19) 徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄 : スポーツ行動の予測と診断, 不味堂出版, 1985, P. 148.